

“定位分化能力”の発揮

前号では、定位分化能力のことについて触れました。要するに、感覚情報処理を行う定位能力、運動反応を適切に発揮する分化能力が単に「合算」的な対応では充分ではない、いわゆる「分かっていたけど、動けなかった…」、「動けたけど、予想と違っていた…」という結果になりかねないということでした。分かりづらいのではと思いますので、今回は具体的な例から、もう一度触れてみたいと思います。

野球の例をあげてみましょう。飛んでくるボールをキャッチするとすると、当然のことですがボールの軌道を予測しなければなりません。どこにボールが飛んでくるのか、それによって身体を移動させ、姿勢を構えてグラブの位置を固定する…といった態勢をとることになります。感覚情報処理を徹底させるとすると、まずは視覚機能をフルに動員することになるでしょう。いわゆる動体視力であったり、空間認知であったりと総動員します。

以前にも触れたことですが、感覚情報処理が強まると、運動系に対しては抑制的な影響を及ぼします。実際はボールを取ることができても、キャッチした後に動作が一瞬静止します。このパターンが観察できるのは子ども達のドッジボールにおいてでしょう。中にはボールをキャッチして、すぐさま相手にボールを投げる子どもがいます。キャッチの段階で何をするかイメージを既に持っているわけですね。野球は、フライをキャッチしてスリーアウトとなれば別ですが、基本的にキャッチして終わるわけにはいきません。次のプレイに移る必要があります。捕殺をねらう、ランナーを牽制する…などなどです。

ボールの判断、構えてキャッチ、次のプレイへ移るといった流れでは、やはり高度な技術として「次の動作」が重要となります。その本質は、キャッチを終えて「次の動作」が始まるのではなく、「ボールの判断」の段階から始まっているということになります。例えば外野フライが上がったとしたら、ランナーの動向を予想しなくてはなりません。ファーストにもサードにもランナーがいれば、全体の流れを予想することになるでしょう。ここで、「ボールの判断」ではボールに対して視覚を総動員するどころか、多くのこ

とに注意を仕向ける必要があります。要するに、視覚情報では、確実にボールの軌跡を予測し、ランナーの動向も予測することになるため、それぞれの情報はわずかなものであっても多くのことを読み取らなければなりません。

少し整理しますと、「ボールの判断」から「ボールのキャッチ」という流れに対して、次の動作、つまり内野手、捕手に送球するかどうかといった、より広い動作課題が覆いかぶさることになるわけです。こうした「課題の広がり」が、定位能力と分化能力の合算ではなく、前回述べたように「定位能力における運動反応の部分と、分化能力における感覚情報処理の部分を変更する」ことによって定位分化能力が発揮されることとなります。ドッジボールで、素早くボールを処理する子どもは、少しずつこの能力を獲得しているといえるでしょう。その前にボールの判断、ボールを投げるという定位能力や分化能力を得ていることが前提になることは言うまでもありません。しかし、それらを徹底させることも決して良いことではありません。次の能力へと導く必要があるからです。指導における大きなポイントともいえます。

